

新旧対照表

* 基本構想のうち、
第1章めざすまちの姿（まちの将来像）、第2章まちづくりの基本目標及び
第3章計画の将来フレームの「1 将来人口の推計」までの内容となります。



目指すまちの姿（まちの将来像）の修正案 一新旧対照表一

新	旧
伊豆の国市は、<u>伊豆半島の付け根に位置しており、東西は山々に囲まれ、南北には狩野川が流れる地勢のもと、豊かな自然の恵みを楽しみながら発展してきたまちです。</u> <u>狩野川の清流に育まれた肥沃な土壌と温暖な気候に恵まれたこの地では、旧石器時代から人の営みがあり、原始・古代から近現代に至るまで数々の歴史・文化を受け継いできました。</u> <u>韮山反射炉を筆頭に、国外にも誇ることができる歴史資産や地域の伝統行事等が重層的に存在し、歴史・文化が地域の誇りとしても、観光等の産業においても、市民の生活に深く息づく伊豆の国市は、まさに「歴史のまち」です。</u> <u>また、湯量豊富な温泉や、田園風景の奥に雄大な富士山を望む美しい風景を有する緑豊かなまちでありながら、首都圏や伊豆半島全域へのアクセスの拠点となる利便性の良さを併せ持つことも、伊豆の国市の大きな魅力となっています。</u> <u>これら恵まれた風土や多様な地域資源を守り、磨き上げ、活かし、次の世代へ継承していくことは、今を生きるわたしたちの使命です。</u> さらに、少子化・超高齢化の進行をはじめとする様々な地域の課題に対応し、未来にわたり伊豆の国市を発展させていくためには、まちの根幹を成す市民一人ひとりが自分らしく輝き、まちづくりの主角として力を発揮<u>していく</u>ことが重要です。 加えて、近年、幸せに対する価値観は、これまでのような経済的な豊かさだけでは測りきれず、実感できる生活の豊かさや心の豊かさを重視するという形に変化しています。 このことから、多面的・持続的に幸福な状態を表すウェルビーイング（Well-Being）の視点を取り入れることで、一人ひとりの幸せの実感を高め、ひいては活力あるまちづくりにつなげていきます。 これからは、市民や各種団体、企業、行政などの多様な主体がともに手を取り合い、みんなで協力し合うことで、年齢や性別、国籍、障がいの有無などにかかわらず、誰もが幸せに暮らせるまちを築<u>いていく</u>という思いを込め、目指すまちの姿（まちの将来像）を次のとおり掲げます。 歴史が息づき、未来にわたり__誰もが幸せに暮らせるまち 伊豆の国	伊豆の国市は、<u>田園風景の先に雄大な富士山を望む景観や、狩野川の清流に育まれた肥沃な大地に恵まれ、先人から受け継いできた数々の歴史・文化が市民の生活に深く息づいている「歴史のまち」</u>です。 <u>こうした多様な地域資源は、伊豆の国市の魅力を形作るかけがえのないものであり、これらを守り、磨き上げ、活かし、次の世代へ継承していくことが、今を生きるわたしたちの使命です。</u> さらに、少子化・超高齢化の進行をはじめとする様々な地域の課題に対応し、未来にわたり伊豆の国市を発展させていくためには、まちの根幹を成す市民一人ひとりが自分らしく輝き、まちづくりの主角として力を発揮<u>できる</u>ことが重要です。 加えて、近年、幸せに対する価値観は、これまでのような経済的な豊かさだけでは測りきれず、実感できる生活の豊かさや心の豊かさを重視するという形に変化しています。 このことから、多面的・持続的に幸福な状態を表すウェルビーイング（Well-Being）の視点を取り入れることで、一人ひとりの幸せの実感を高め、ひいては活力あるまちづくりにつなげていきます。 これからは、市民や各種団体、企業、行政などの多様な主体がともに手を取り合い、みんなで協力し合うことで、年齢や性別、国籍、障がいの有無などにかかわらず、誰もが幸せに暮らせるまちを築<u>く</u>という思いを込め、目指すまちの姿（まちの将来像）を次のとおり掲げます。 歴史が息づき、未来にわたり、誰もが幸せに暮らせるまち 伊豆の国

基本目標1の修正案 一新旧対照表一

基本目標1 こどもも大人も、豊かに学び、自分らしく健やかに暮らせるまち（子育て、こども・若者、教育、生涯学習・歴史文化芸術・スポーツ、保健・医療）

新	旧
こどもは未来を担うまちの宝であり、こどもたちの笑顔は周りの人も幸せにする力を持っています。こどもを__安心して産み育てることができるよう切れ目なく支援するとともに、<u>子育て世帯のニーズをはじめとする</u>多様な__ニーズに応えることで、<u>こどもも親も自分らしい生き方を選択できる</u>、子育てしやすいまちづくりを進めます。併せて、こどもたちが夢や希望をもって健やかに成長し、自分の力で未来を切りひらいていくことができるように、地域ぐるみでこどもを守り育てる体制づくりも進めます。 また、豊かな学びは人生をより豊かなものにします。そのため、こども<u>から</u>大人まで__すべての人々が、いつでも、どこでも、何度でも、<u>生涯を通じて</u>主体的に学ぶことができるまちづくりを進めます。文化芸術やスポーツ<u>による</u>生きがいがづくりや交流の場の充実に取り組むほか、地域の誇りである歴史文化を守り、未来へ継承しつつ、身近に親しむこと<u>が</u>できる環境を整備します。 さらに、誰もが自分らしいライフスタイルを実現し、生き生きと暮らしていくためにも、生涯を通じた健康づくりを支援<u>するとともに</u>、安心して適切な医療を受けられるよう、地域医療体制の確保を図ります。	こどもは未来を担うまちの宝であり、こどもたちの笑顔は周りの人も幸せにする力を持っています。まずは、こどもを<u>望む人々が</u>安心して産み育てることができるよう切れ目なく支援し、<u>多様な保育ニーズ</u>に応えることで、子育てしやすいまちづくりを進めます。こどもたちが自分らしく、夢や希望をもって健やかに成長し、自分の力で未来を切りひらいていくことができるように、地域ぐるみでこどもを守り育てる体制づくりを進めます。 また、豊かな学びは人生をより豊かなものにします。そのため、こども<u>はもちろん、</u>大人まで<u>含めた</u>すべての人々が、いつでも、どこでも、何度でも、主体的に学ぶことができるまちづくりを進めます。文化芸術やスポーツ<u>を通じて、</u>生きがいがづくりや交流の場の充実に取り組むほか、地域の誇りである歴史文化を守り、未来へ継承しつつ、身近に親しむこと<u>ので</u>きる環境を整備します。 さらに、誰もが自分らしいライフスタイルを実現し、生き生きと暮らしていくためにも、生涯を通じた健康づくりを支援<u>し、</u>安心して適切な医療を受けられるよう、地域医療体制の確保を図ります。

基本目標2の修正案 一新旧対照表一

基本目標2 地域で互いに支え合い、誰もが安全で安心して住み続けられるまち（地域福祉、包括的支援、防災、市民安全）

新	旧
生きがいを持つこと、居場所があることは、幸せを実感する上で大切な要素です。生きがいや居場所は、人と人や<u>地域社会</u>でのつながりの中から生まれることから、地域での交流やコミュニケーションを促進し、お互いを気にかけて関係づくりにつなげます。また、市民の地域福祉への参画意識を高め、相互に支え合い、助け合う地域づくりを進めます。 年齢や性別、<u>国籍、障がいの有無</u>などにかかわらず、誰もが自分らしく<u>生きることができ</u><u>る</u>社会づくりも重要です。住み慣れた地域で安心して自立した生活ができるようにするため、支援を必要とする人のニーズや個人が抱える様々な困りごとに応じて、適切な福祉・介護などのサービスを提供できる体制の充実を図ります。 さらに、風水害や地震など、多発する大規模な自然災害から市民の生命や財産を守るため、<u>市民や地域が主体となった自助・共助による防災力の向上</u>、治水対策<u>の推進など</u>、ソフト・ハードの両面から災害対策を強化します。加えて、巧妙化する犯罪や、交通事故に巻き込まれないように、関係機関と地域が連携して市民の安全を守ること、安全・安心を実感し、住み続けること<u>が</u>できるまちづくりを進めます。	生きがいを持つこと、居場所があることは、幸せを実感する上で大切な要素です。生きがいや居場所は、人と人や地域社会<u>と</u>のつながりの中から生まれることから、地域での交流やコミュニケーションを促進し、お互いを気にかけて関係づくりにつなげます。また、市民の地域福祉や支援活動への参画意識を高め、相互に支え合い、助け合う地域づくりを進めます。 年齢や性別、<u>障がい、国籍</u>などにかかわらず、誰もが自分らしく<u>生きられる</u>社会づくりも重要です。住み慣れた地域で安心して自立した生活ができるようにするため、支援を必要とする人のニーズや個人が抱える様々な困りごとに応じて、適切な福祉・介護などのサービスを提供できる体制の充実を図ります。 さらに、風水害や地震など、多発する大規模な自然災害から市民の生命や財産を守るため、<u>地域防災力の向上や治水対策をはじめとして</u>、ソフト・ハードの両面から災害対策を強化します。加えて、巧妙化する犯罪や、交通事故に巻き込まれないように、関係機関と地域が連携して市民の安全を守ること、安全・安心を実感し、住み続けること<u>の</u>できるまちづくりを進めます。

基本目標3の修正案 一新旧対照表一

基本目標3 経済が循環し、にぎわいや交流が増え、市民一人ひとりが活躍するまち（商工・雇用、農業、観光・シティプロモーション、市民活躍）

新	旧
地域が稼いだお金が地域で使われ、豊かさが巡るまちを目指し、地域経済を支える中小企業・小規模事業者の<u>それぞれの成長段階に応じた支援を進めます。併せて、</u>多様な人材が「働きがい」をもって働くこと<u>が</u>できる環境の整備<u>やスタートアップを促進</u>します。生産性と収益性の高い農業や、<u>地域の特性を活かした多彩なテーマ別観光を推進するなど、産業別の振興を図りつつ、産業間での連携を促進することで地域経済全体の活性化につなげます。</u> また、まちへの愛着を深める取組やまちと継続的に関わる機会の創出などを通じて、市民が「住み続けたい、帰ってきたい」、市外に住む人が「行ってみたい、住んでみたい」と思えるような、にぎわいや交流<u>が</u>あふれるまちづくりを進めます。 さらに、まちづくりの主役である市民が、自分たちが住む地域を自分たちの力でより良くしていこうとする活動を支援するとともに、一人ひとりの個性を活かして積極的に社会に参画できる機会を増やすことで、活力<u>が</u>ある地域社会を創造します。	地域で稼いだお金が地域で使われ、地域で豊かさが巡るまちを目指し、<u>事業者に向けた取組と働きたい人・働く人への取組を両輪で進めます。地域の</u>経済を支える中小企業・小規模事業者の<u>持続的な成長や、</u>多様な人材が「働きがい」をもって働くこと<u>の</u>できる環境の整備などを支援します。<u>農業分野では、生産性と収益性の高い農業に向けた取組や有機農業の普及を進め、観光分野では、多彩なテーマ別観光を進めるなど、地域の特性を活かした産業の活性化を図ります。</u> また、まちへの愛着を深める取組やまちと継続的に関わる機会の創出などを通じて、市民が「住み続けたい、帰ってきたい」、市外に住む人が「行ってみたい、住んでみたい」と思えるような、にぎわいや交流<u>の</u>あふれるまちづくりを進めます。 さらに、まちづくりの主役である市民が、自分たちが住む地域を自分たちの力でより良くしていこうとする活動を支援するとともに、一人ひとりの個性を活かして積極的に社会に参画できる機会を増やすことで、活力<u>の</u>ある地域社会を創造します。

基本目標4の修正案 一新旧対照表一

基本目標4 ひとと自然が共生し、持続可能で豊かな暮らしができるまち（自然・生活環境、循環型社会、水環境、まちなみ形成、交通・道路）

新	旧
狩野川をはじめとする清流、城山や葛城山などの美しい自然と、これらがもたらす豊かな恵みは、人々の生活や産業を支える礎となるものです。かけがえのない自然環境を未来に引き継いでいくため、市民、事業者や行政が一体となって脱炭素社会の実現に向けた取組や環境への負荷を減らす取組を進めます。加えて、水道・下水道の適正な運営やグリーンインフラを推進することで、人と自然が調和する持続可能なまちづくりを進めます。 また、少子化・超高齢化による人口減少が進む中で暮らしの質を維持していくため、コンパクトなまちづくりにも取り組みつつ、地域の特性に応じた適切な土地利用を図ります。官民連携により、まちに新たな魅力や価値を加え、ひとが集い、交流が生まれ、にぎわいの中心となるまちなかの活性化を進めます。 さらに、暮らしの各拠点を結ぶ公共交通は、生活を支える大切な移動手段であることから、地域の実情に応じた形で再構築し、持続可能で利用しやすいネットワークづくりを進めます。	狩野川をはじめとする清流、城山や葛城山などの美しい自然と、これらがもたらす豊かな恵みは、人々の生活や産業を支える礎となるものです。かけがえのない自然環境を未来に引き継いでいくため、市民、事業者や行政が一体となって脱炭素社会の実現に向けた取組や環境への負荷を減らす取組を進めます。加えて、水道・下水道の適正な運営やグリーンインフラの活用を図ることで、人と自然が調和する持続可能なまちづくりを進めます。 また、少子化・超高齢化による人口減少が進む中で暮らしの質を維持していくため、コンパクトなまちづくりにも取り組みつつ、地域の特性に応じた適切な土地利用を図ります。官民連携により、まちに新たな魅力や価値を加え、ひとが集い、交流が生まれ、にぎわいの中心となるまちなかの活性化を進めます。 さらに、暮らしの各拠点を結ぶ公共交通は、生活を支える大切な移動手段であることから、地域の実情に応じた形で再構築し、持続可能で利用しやすいネットワークづくりを進めます。

計画の将来フレームに関する修正案 一新旧対照表一

将来推計人口

新	旧
少子化・超高齢化の進行により、国全体で人口減少がさらに加速する中、伊豆の国市がまち全体の活力を保ち、持続可能なまちであり続けるためには、人口減少を抑制することが最も重要です。 まず、将来人口の推計については、令和7年3月に改訂した「伊豆の国市まち・ひと・しごと創生長期人口ビジョン」に準拠するものとします。 将来人口について、合計特殊出生率の最新値や社会移動率などの現状推移等を考慮し、市で独自に推計したところ、現状のまま推移した場合は、2060年の将来人口は25,169人まで減少する見通しです。 しかし、施策の効果により、2035年までに合計特殊出生率を1.36まで回復・以降維持するとともに、現状の社会移動率のうち若年層の転入・転出による増減を2030年までに5%改善・以降維持することができれば、2060年までの人口減少<u>率</u>を約7.6<u>ポイント</u>抑えることができます。 このシミュレーションに基づき、人口ビジョンにおいては、2060年の人口28,723人を目標と定め<u>ている</u>ことから、この実現を目指し、出生率の回復や社会増減の改善に向けて各種政策・施策を推進していきます。	少子化・超高齢化の進行により、国全体で人口減少がさらに加速する中、伊豆の国市がまち全体の活力を保ち、持続可能なまちであり続けるためには、人口減少を抑制することが最も重要です。 まず、将来人口の推計については、令和7年3月に改訂した「伊豆の国市まち・ひと・しごと創生長期人口ビジョン」に準拠するものとします。 将来人口について、合計特殊出生率の最新値や社会移動率などの現状推移等を考慮し、市で独自に推計したところ、現状のまま推移した場合は、2060年の将来人口は25,169人まで減少する見通しです。 しかし、施策の効果により、2035年までに合計特殊出生率を1.36まで回復・以降維持するとともに、現状の社会移動率のうち若年層の転入・転出による増減を2030年までに5%改善・以降維持することができれば、2060年までの人口減少を約7.6%抑えることができます。 このシミュレーションに基づき、人口ビジョンにおいては、2060年の人口28,723人を目標と定めることから、この実現を目指し、出生率の回復や社会増減の改善に向けて各種政策・施策を推進していきます。